

佐多稲子全集

第十四卷／樹影
時に佇つ

講談社

佐多稲子全集 第十四卷



昭和五十四年一月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―二―二二 郵便番号一一二

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替東京八―三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

定価／二八〇〇円

©佐多稲子 昭和五十四年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。 Printed in Japan

目次

初秋の雨	哀れ	落葉	木造アパート	年賀状	春浅く	*	重き流れに
303	294	285	280	271	258		7

雪の舞う宿 314

歲月 326

幸福の手応え 337

あとがき・時と人と私のこと (13) 347

注解 354

初出誌紙・発表年月 356

佐多稲子全集

第十四卷

重き流れに

早春

青山六丁目のそのひとつの小路は、大きい邸もないけれど、同じような板塀のつづく静かに落ちついた通りであつた。朝のひととき、通学の子供たちの軽いざわめきのあと、出勤の靴音にまじつて、官員らしい人に乗せた人力車が一台通る。そういうことの過ぎたあととは殆どひっそりして、縁の外に小鳥の声が聞かれた。

岡野の家がこの小路に移つてきてから、ようやく一年と半になる。この家では中学生の男の子と、あと二人の女の子たちが学校へ出てしまうと、母の滋子と長女の尚子^{ななこ}が残り、家の中もひっそりした。今朝もそういうとき、尚子は茶の間につづいた小部屋で、髪を

結つていた。尚子の色白く、華奢な身体つきと、梳かしている黒髪の艶やかに豊かなのは、母に似ていた。が、寛やかに丸みのある額や、象牙づくりのような鼻筋、花の蕾のような口元などの、柔かな輪郭の中にととのっているのは母にまさつて美しく秀でて見えた。そうつと、しかしいつも何か問いかけているようなまなざしに、若さがみずみずしい。尚子はこの春十六歳になつていた。

茶の間で柱時計が十時を打つ。滋子はそれを見上げて、思いのかげる視線になり、それから尚子に呼びかけた。

「尚さん、お前、これから山栗まで行つておくれでないか」

「はい」

と尚子は答えて、自分の答えた表情を鏡の中に見つめた。滋子はためらうように言い直す。

「母さんが行つてもいいのだけど」

「いいえ、母さん、わたくし、行つてまいります。久しぶりに日本橋へ行くのは嬉しいわ」

尚子はあとの言葉を云うと、もう自分でも日本橋へ久しぶりに行くということに弾んだ表情になつてい

た。山栗は〈栗〉という商標で知られた証券会社である。それは兜町にあった。兜町とおもうだけでなつかしい。日本橋は尚子の生れて育った場所だった。明治四十一年の市区改正で、その住みなれた家を立ちのかねばならなかったとき、お上の御命令ならば、とこの青山へ移ってきたものの、日本橋室町三丁目には尚子の胸に宝物のように抱かれている。江戸の中心に生^{せい}を得たということは、ひとのおの故郷への思いに増して、尚子の心の輝く支えになっていたようであった。今日、山栗へ行く使いが何であるか、聞くまでもなく尚子は知っている。この使いも尚子は初めてではない。今日も母の手元は不如意になったのであろう。こういうときこの家では公債を手離すということしか、ほかに方法を知らないのであった。

尚子は軽く前髪をふくらませたひさし髪に結い上げると外出の着更えをした。滋子は簞笥の小抽出しから、尚子に持たせる公債を取り出しながら、暇にかけりを見せている。が、滋子には、公債を割引くということが、みすみす損失になる、ということさえ果して実感されているのか、それよりも彼女は、尚子にこの使いをさせることの方に気を重くしている。元、前橋

松平藩中五百石の、士族の出である滋子は、明治に生れながら、生家の氣風を濃く残して、金銭にうかつた。尚子の方が母のその弱さを知っていた。まだ尚子が十歳ぐらいのときだったが、長岡の縮屋が反物の代金を取りに来たときのことを尚子は今でも覚えてい^いる。お下げ渡しを願います、と頭を下げる縮屋に、滋子は袋ごと差出して、どうぞその中から持っておいで、と言ったのだった。それでいて、借着より洗^{せん}い着、鷹は飢えても穂を食まず、などと云う母であった。がこの母のしつけは、日本橋室町三丁目のいわゆる下町のある厳しきにもどこか合致するものであった。日本橋室町のきびきびと華やいだ鬱^{ふさ}囲^い氣の中には、定め^{さだめ}の固い氣風が存在して、士族出の滋子のしつけとそう別のものでなかったのである。尚子はそのようにして育ってきた。

父の岡野司郎は、室町に二十五代つづく商家の出でありながら、自身は通信省の電信技師であった。明治の新風を鋭敏に受けとめた岡野青年は、森有礼の下に身を寄せ、帝国大学創立のとき、ここに学んだのである。以後、彼は日本の新たな無線電信の仕事に心血をそそいだ。自らの研究と後進の教育、指導にも当り、

台風のもとには沖縄から千島まで被害調査に出かけもした。岡野司郎にとってこの情熱は、開けゆく日本の国威に参与するものだったのである。司郎がその千島へ出張したときである。上野へ帰着する時間の知らせが電報できて、尚子は母の云いつけで弟の庸介を連れて上野駅へ父をむかえに出た。むじなの襟巻をした父はのび放題の髻づらで汽車を降り立ったが、尚子と庸介を見ると、おう、と肩を叩いたまま、

「お前たちは先きへ帰れ、父さんはこれから宮城へ行って御報告申上げ、それから学校へまわる」

と、すたすたと去って行った。岡野司郎は二重橋前で手をついて、岡野司郎、ただ今帰りました、と報告する、そういう男であった。夏の初めには、宮城前の松の木の毛虫を取れ、と尚子や庸介に云いつけもした。室町から宮城前まで遠くはない。尚子たちは、割箸と、空かんに石油を入れて持って行き、宮城前の松の木の子毛虫を取ったことが何度かある。

この父が急性肺炎で亡くなったのは尚子の十三歳のときであった。この青山へ移ってから三回忌をむかえた。この家の万事が音をひそめたような静かさにあり、滋子の品のいい顔に憂いのかげのあるのは、この

悲しみに重なる頼りなさを見せているものであった。

尚子は寄り添うようにして母を支えているが、まだ肩上げを残した娘である。今日、山栗へ売りにゆく公債は、岡野司郎の無線電信の仕事につくした功労が伝わって、四人の遺児の育英資金にと、広く集まったものだった。しかし恩給暮らしは、豊かであるはずはなかったから、尚子は青山へ移ると同時に、お茶の水付属への通学をやめた。先ずひとりきりの男である庸介の学費を確保しておかねば、という覚悟であった。

仕事を終えた尚子は、緋の銘仙をきて花模様のある紫縮緬の帯を小さくお太鼓にしめていた。滋子はその帯の結びを直してやりながら、気づかう調子になって云う。

「用がすんだら、まっすぐ帰っておいでなさい。室町のおあたりを歩いて、知った人に顔を見られるのは、みっともないものではありませんよ」

「大丈夫ですよ母さん。知った人に逢ったって別にかまいませんでしよう。ちょっと歩いてみたいじゃありませんか。なつかしいんですもの」

「娘がひとりでおらぶら歩きなどするものではありません。母さん心配して、待っていますからね」

「はい」

殊更に首をかしげて見せて頬笑んだ。長女だから、尚子はいつとなしに母親に対していたわる接し方をしている。

「行ってまいります」

畳おもての履物に紫びろうどの緒がすがって、足袋の白さがきわ立つ。小さく形のいい足先きであつた。

青山から来ると日本橋界限は、別世界の活気に感じられた。市区改正で広くなった表通りでは、あつちでもこつちでも建築中だし、人力車はひっきりなしに走っていた。筒袖、縞木綿の着物に前かけ姿の小僧が忙しそうに歩いてゆくのも尚子はなつかしい。彼女は山栗で三枚の公債を金に換えた。一枚百円の公債は六十五円に割引かれたが、とにかく大金だからしつかりと風呂敷を結んで抱えていた。証券会社での応対の気持がまだ残って、尚子はちよつと気負った表情になっている。父が亡くなって、現在はわが家のいちばん不幸なとき、という気持がある。しかも明日どう転換できるという事情でもない。それをはっきり知った上で、自分の中の何かを湿りけなく保っているような尚子の

張り、今歩いている町の気質かもしれない。

日本橋も改築の最中であつた。尚子たちが室町を引上げる頃に始まった工事がまだ続いている。尚子の知っている日本橋は木の橋だった。まもなく日本橋はコンクリートと鉄の洋風の橋に出来変わるのである。すでに川の上に、二つのアーチ型に組んだ石の橋桁が見えていた。日英同盟というのができ、日露戦争がとにかく勝利で終って、日本は世界の五大国のひとつになったから、東京の町もどんどん変るのだ、と尚子はおもう。日英同盟が結ばれたとき尚子は小学の三年生であつた。コンノート殿下という英吉利の貴公子が日本訪問をしたとき、越後屋が三越百貨店になって、その三越百貨店の門の上に、両国旗を組み合せて掲揚してあつた。歓迎、アーサー・オブ・コンノートと片仮名で書いてあるのを、尚子は何度も口の中であくり返して覚えたものだ。

その三越百貨店はすっかり大きな洋館に建ち変わっている。尚子はそれを今日初めて見るわけではないが、内部がすっかり見える広いガラス張り、やはり新しい感覚で眺められるものであつた。三越の次の建物が三井の集会所、その五、六軒先きにラシャ問屋があ

る。尚子はちよつと歩調をゆるめてこの店の前を通つた。もうこの店を目の前にしては、以前のわが家らしい描きようもない。このラシャ屋の店が元の自分たちの家の跡だとわかつていても、かつての、表通りから一歩引込んだ位置にあったし、またやの、どっしりした中に玄関など気どつて粹風でもあった家は、尚子の記憶の中に残るだけであつた。用心籠といつて、畳一枚ほどの大きな竹籠を三段に重ねて、天井すれすれに吊つてあつたのなども目に浮んでくる。すわ火事、というときの用意の籠だつた。あんな籠、どうしたのかしら、と尚子はおもうが、そんなものも無くなつてしまつたにせよ、母を責められはしない。おもいがけない父の死のあと、一年後には住みなれた家を離れねばならなかつた母としては、古い家財などどうでもよかつたろう。父の棺をおくり出した目のことがまざまざとおもひ出されると、尚子はどう足早になつた。

滋子が日本橋へ来たがらないのもわかるようにおもわれる。尚子も室町の通りを歩きながら何となくそわそわとなるものがあつた。幸い誰に顔を見られるというともなかつたが、自分の感情の中に何かあらうものがある。自分がここで生れたという誇らしいもの

とともに、尚子はこの町が心から好きだつた。テケテン、テケテンと軽く弾む祭りばやしの音も尚子の感覚に染みついている。用心籠が備えてあるほど下町は火事早く、ひとつ半からすり半まで火の見る半鐘が聞えてくるとそれを耳で数えて、三つ半なら氣負い立ち、一つ半なら、ああ遠い、とむしろつまらなかつた。こういう氣質を尚子は自分でも承知している。祭りが好き、火事が好き。そういうときのこの町の、きびきびと華やぐのが子供の心に好もしく染みついたのにちがいない。尚子が今歩いているこの道は先頃までゴム毬をついて遊んだところだ。向いの浮世小路の福德稲荷の縁目では粋な手拭かぶりのおぼさんが鉄板焼で小さな籠をつくつてくれたし、五月と九月には、この神主が岡野の家にもおはらいに來た。尚子は今そこを歩いている。が今はもう、そこからどこへ一歩入り込んでゆくとところはなかつた。尚子の家を買いつた羅紗問屋を、彼女は知りはしない。ここで育つた自分というものを抱いて帰るしかないが、何だか不安な氣がしてくる。尚子はもの悲しい感じにもなり、しかしその氣持をねじ伏せるようにして歩き、本町の角から常盤橋御門の方へ曲がつた。春はまだ浅くときおり冷たい

風が吹いていた。

そんな気持ちで尚子がわが家に帰りつくと、滋子が玄関に走り出てきて、妙にまじまじと見た。おや、と尚子は母の表情のちがっているのに気づいたが、そんなにおそかったかしら、と、おもいながら詫びて云った。

「どうもおそくなりました」

「ああよかった」

滋子はほうっと、肩を落とすように云う。

「何だか心配で心配で」

「何をそんなに心配してらっしゃるの。大丈夫ですよ。母さん。わたくし、もう子どもではありませんもの」

「だから心配なのですよ」

滋子は尚子の渡す風呂敷包を無意識のように受けとって、尚子を先きに立てて茶の間へ入った。

「もう、お前をお使いになど出せない」

とまた云って、再び尚子を改めて見るようなまなざしになった。

「どうして母さん。そんなにおそうございましたか」
滋子はちよつと答えをためらうように間をおいてか

ら打明けるように云い出した。

「尚さん、お前のことが新聞に出ているの」

「えっ。何ですって。新聞に出てますって」

「そうなのよ」

滋子はようやく落ちつきをとり戻して、うしろの茶簞笥から、折りたたんだ新聞を取り出した。尚子の方が不安になって、

「なんて出てますの」

と、肩をのり出させた。滋子は新聞をひろげてから、ひとところを指さして尚子に渡しながらまた云う。

「困ってしまうねえ」

「あら」

尚子は自分の写真まで掲載されているその記事がどういう内容なのか、くわしく読むまでもなくわかった。

——たとうれば紅梅のあでやかな気品、わが国の無電事業に功勞ありし岡野司郎の遺児、青山につつましく咲き出でて香り立つ——というような文章に目を走らせて、尚子は頬を上気させた。見出しなどで分るが、この夕刊紙は東京十五区の娘評判記というようなものを連載しているらしい。岡野尚子嬢は、赤坂区か

ら選ばれている。

「どうでしょう。母さん。わたくし困るわ」

とつきに尚子をおそう思ひは、晴れがましきよりも差じらいであった。滋子はまた尚子を見つめて云う。

「本当に、ありがた迷惑ですよ。うるさくなるのが困ります。こういうことしてもらいたくなかつたねえ」

滋子のそういうのも本心である。さつき郵便配達夫の投げ込んでいったこの新聞を見てから、滋子はむしろ胸がさわぎ立ち、使いに出した尚子が、どこかでさらわれてもするような不安にとらわれていたのである。新聞になど書かれるということは、尚子をますます人目にさらすことにちがいない。女世帯の心許なさで、滋子は今までにもわが子の際立つて美しく成長するのを、自分では囲い切れぬようにもおもつて却つてはらはらしてきた。すでに縁談の申込みもいくつかあつて、滋子の手元には数枚の写真もとどいている。夫がいないから、軽く急きたてられるような思い過ごしとして、滋子はむしろ心細い。その上、新聞などに出て、一層わずらわしくなるのを滋子はおそれた。

この二、三年、新聞や雑誌に美人投票が流行して、春本の万竜、富田屋八千代という名妓の評判が高かつ

た。もつともそれ以前にも美しい人の噂は人の口にのぼつて、岩倉具視令嬢が東京三美人のひとつであつたと、尚子は父から聞いたのを覚えてゐる。その人がのちに、父の頼つた森有礼の夫人であつたから、尚子もその美しい人を知っている。尚子が父にとまなわれて森家へあがる頃、すでに夫人は後室であつた。耳だけのひびきで、「おこしさま」と尚子は云つていたが「御後室さま」と云うことだつたと、そのときは知らなかつた。「おこしさま」に千代紙であねさまを作つて頂きながら尚子は「おこしさま」は東京三美人のひとつでいらつしたのだ、とうなずくように見上げていたこともある。やっぱりそういうときであつた。

「尚」

と、「おこしさま」は少女に語りかけて、

「今年からはお正月はやめにして、クリスマスというのをしましょうね。そのクリスマスには、さめが橋の可哀想な人たちに贈物をするのですよ」

それはいわば、「おこしさま」のひとり言のつぶやきのようにも聞えた。尚子にこの言葉の重みがわかりようはずはなかつたが、何か、しんとして、
「はい」

と膝に手をおいておとなしく答えた。そのときの「おこしさま」の美しさが、悲しいほどにおもえたのは、尚子が少しは何かを感じたからだだったろうか。

とにかくその新聞に尚子が写真入りで書き立てられたということは、このひっそりした暮らしに、おもいがけない外の風が吹きつけてきたことであつた。どこで誰が聞き込んだのか、そんなこともわからないから、それそれとなる。

「どこでこういうこと調べるのでしょうか」

尚子はくり返して読んだ記事の、特にまちがっているところもないけれど、何となくそこに書かれている岡野尚子は、自分とはちがうようにも感じられてくるくらいに、最初のおどろきから少し立ち直つた。滋子の方は、この新聞を見たとき、尚子を外へ出していたから、まるで、どこかへさらわれてでもしようような気持ちにもなつたのが、ようやく平常になつてゐる。しかし山栗で公債がいくらに売れたのか、それをおもふ余裕はまだなくて、むつかしい顔になつて云う。

「そりゃあねえ、娘というものは、どこで誰が見ているかわからないのですよ。いつでも誰かが見ているとおもわなければ」

「はい」

と尚子は素直に答えて、母がその新聞を丁寧に折つて抽出しにしまふのを見ていた。

尚子の美しさが新聞に書かれたということは、彼女の知らぬ間に起つたことにちがいない。あとで分つたことは、近所にその社の新聞記者が住んでいたというめぐり合せであつた。が、梅花もまだ蕾にしろ、その記事の文章をかりて云えば香り出づ、という年頃だから、書かれたということでは外側から大きく関わりあつてくることにもなつた。早速というように持ち込まれた縁談もある。だから滋子は、その後は尚子の外出に一層気をつかつた。

今日は尚子は、青山北町に生花の稽古にきていた。陽光がもう定まって暖かい日であつたから、座敷の障子をあげ放つて、相弟子の娘たち四人、薄べりに並んで蘇芳の花を活けていた。池之坊師匠の家はいつもそれらしくとのつたたたずまいだったが、今日は特にすべてゆきとどいていた。門の内には打水がしてあり、床の間のかざりもいつもとちがつていた。尚子たちの坐っている薄べりも新しい。尚子の母と同年配の師匠